

郡上八幡における地域認識としての サウンドスケープの実態とその構造

焔場 星澄¹・佐々木 葉²

¹学生会員 早稲田大学大学院創造理工学研究科建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:sierra_0606@ruri.waseda.jp)

²フェロー会員 博士(工学) 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

本研究では岐阜県郡上八幡を対象に、住民の地域認識に対して音からのアプローチを試みる。インタビュー調査により住民によって知覚された音環境の実態及びそれを認識する構造を明らかにすることを目的とした。その結果、サウンドスケープの実態として住民が注意を向けて聴いている音や、サウンドスケープの季節的な構造及び空間的な構造が明らかになった。また、地域認識としてのサウンドスケープの構造として、「具体的な場面での認識」によって下支えされた「まちや生活の中で位置づけられた認識」と「変化を意識した認識」があることが明らかになった。

キーワード: サウンドスケープ, 地域認識, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 郡上八幡

1. はじめに

(1) 背景と目的

土木・建築分野では、まちづくりや景観計画をはじめとする実践を支える研究として、住民の地域認識を把握する取り組みが数多くなされてきた¹⁾。これらの研究は環境の視覚的側面から住民の地域認識を把握するものがほとんどであるが、人は環境を捉える際、聴覚、嗅覚、といった視覚以外の感覚も用いている。人々の地域認識も同様に五感を通して知覚した環境が元となって形成されるはずであり、地域認識のより深い把握には視覚以外の側面から分析を行うことが必要だと考えられる。

五感の中で特に音の意味的側面に注目した分野に、カナダの作曲家R. M. Schaferによって1960年代に提唱されたサウンドスケープがある。Schaferらによって70年代に実施されたWSP (World Soundscape Project) での活動²⁾では、カナダやヨーロッパをフィールドとした調査が行われ、サウンドスケープという分野が成立した初期から地域研究的なアプローチが行われていたことがわかる。

人々が地域の音をどのように捉えているかを把握することは、視覚的側面からの取り組みが中心となる地域景観での実践において新たな観点を取り込むための手がかりになると考える。以上の将来的目標を踏まえ、岐阜県郡上八幡におけるサウンドスケープの実態の把握とその認識の構造を明らかにすることを本研究の目的とする。

(2) 対象地の選定

本研究の対象地である郡上八幡は、岐阜県郡上市の旧八幡町地域の市街地の通称である。市街地は長良川の支流吉田川によって北町、南町の2つに分かれ、江戸期の城下町の構造が町割などに残されている。町には伝統的な住宅である町家が多く残り、水路をはじめとする伝統的な水利用施設も残されている。

それらの水利用施設が発する水音についての研究³⁾もみられ、環境省が1996年に選定した「残したい日本の音風景100選」⁴⁾においても郡上八幡の「吉田川の川遊び」が選ばれており、地域に特有な音として水音が注目されてきたことがわかる。また、古川ら⁵⁾は生活景の観点から郡上八幡のサウンドスケープを調査し、地域行事の郡上踊りの音や時の鐘など、水音の他にも多様な音が住民に意識されていることを明らかにしている。

(3) 概念の整理

既存の文献を参考に、本研究でのサウンドスケープの位置づけを示す。

サウンドスケープの定義として、日本サウンドスケープ協会のウェブサイトではB. Truaxによる定義を訳し「個人、あるいは社会によってどのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音環境。それゆえサウンドスケープは、個人(あるいは文化を共有する人々のグループ)とその環境との間の関係によって決まる」と示している。また、2014年に発行されたサウンドスケープ研究の国際

標準ISO 12913-1での定義は永幡⁶⁾の訳によると「あるコンテキストの中で、個人又は人々が、知覚・経験・理解した音環境」であり、「コンテキストは、時空間における、人と活動と場所の相互作用」であるとしている。

以上の定義から、サウンドスケープは人々に知覚され理解された状態を前提としており、そこでの人々とは文化や活動、場所などを共有する地域住民といえる。このことから、サウンドスケープ研究における研究対象は佐々木⁷⁾が4つに分類した地域景観研究のうちの「地域住民の認識」に該当すると考えられる。

以上を踏まえたうえで、本研究では認識の度合いに応じてサウンドスケープを以下の2つに位置づける。まず、表層的な認識として知覚された状態の音環境を「サウンドスケープの実態」として位置づける。そしてそれらが理解、解釈されたより深層的な認識を「地域認識としてのサウンドスケープ」として区別する。

(4) 既存研究の整理と本研究の位置づけ

SchaferらによるWSPの調査研究以降、地域のサウンドスケープに対する様々な取り組みがなされている。アンケートやヒアリングをもとに地域住民の音に対する印象を調査した研究⁸⁾がある一方で、フィールドの音環境の実態を調査者の知覚や物理的指標をもとに記述した研究⁹⁾もあり、実態と人々の印象双方を調査してその関係を考察した研究¹⁰⁾もある。これらの研究に共通する大まかな方向性として、騒音計などを用いた物理的音環境の調査、調査者による音聴き調査、アンケートやヒアリングなどを用いた認識の調査の3つが見られる。

一方で細かな調査手法に関しては一貫性が見られず、これに問題意識を置いて、評価手法に関する研究¹¹⁾など、サウンドスケープの方法論に関する研究も行われてきたが、ここで検討された手法を応用した研究の蓄積も無く、国内のサウンドスケープ分野で確立された調査・分析手法は見られないのが現状である。

国際的な動向としては、サウンドスケープ研究の国際基準としてISO 12913シリーズが発行され、インタビューガイドラインや調査手法としてサウンドウォークが提示される⁶⁾など、研究の方法論の確立、実践への応用へ向けた取り組みが本格化している。また、デファクトスタンダード的に用いられる評価尺度が存在する⁶⁾など、分析手法の確立もある程度見られる。しかし、翻訳に伴って生じる問題や居住国などの要素によって人々が音環境を認識する背景が変化し、それによって評価構造が大きく変わる恐れがあるとの指摘もあり⁶⁾、海外の手法を用いる際に検討する余地は多いと考えられる。

(3)で位置づけた地域認識としてのサウンドスケープを明らかにするためには、音と聴取する主体それぞれの背景を掘り下げる必要があるが、サウンドスケープ分野の既存研究で住民の認識を調査したものの多くは地域を象徴する音や音の選好を明らかにすることにどまっている。本研究は、音そのものに対する印象や選好だけでなく音にまつわるエピソードなどを含めて分析を行う。

(5) 研究方法

本研究では、郡上八幡の住民に対してインタビューを実施し、得られた語りの中からサウンドスケープ分野での音の最小単位である音事象¹²⁾を抽出してその種類、性質を把握する。また、より詳細なインタビューを再度実施し、そこからも音事象の詳細を把握するとともに、得られた逐語録のテキストデータの質的分析によって、地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにする。

2. 郡上八幡におけるサウンドスケープの実態

(1) インタビュー調査の概要

古川ら⁵⁾の研究では、郡上八幡における印象をベースとした音事象をアンケートを通じて収集している。本研究では印象に関する質問項目を特別設けずに、郡上八幡で聴こえる音の収集をインタビューを通じて行った(表-1)。以後このインタビューを1回目インタビューと呼ぶ。

これに加えて、音にまつわるエピソードなどを収集するためにより詳細なインタビューを実施した(表-2)。以後このインタビューを2回目インタビューと呼ぶ。2回目インタビューは1回目インタビュー対象者のうちの10名を対象にして実施した(表-3)。本章では1回目インタビューの際に記録したメモから音事象を抽出し、その種類と場所、時期がわかるものを取り上げて分析を行った。また、音事象の場所と時期については、2回目インタビューで得た情報を加えて分析している。

(2) 言及された音事象の傾向

1回目インタビューを通じて収集した音事象を、古川らの研究を参考に類型化した上で集計したものを図-1に示す。

収集された音事象の多くは、古川らの研究で心地よい音、大切な音と住民に指摘されていたものと一致する。また、1回目インタビューの中では、単純に聴こえる音が言及された他、現在は聴こえない音や普段は聴こえない音についても言及されており、本調査で集計された音事象は実際の郡上八幡の音環境ではなく、住民の音に対する意識の傾向が反映されていると考えられる。

表-1 1回目インタビューの概要

調査期間	2020年10月14日(水)～11月5日(木)
調査対象	郡上八幡の住民42名
方法	地域的な偏りが出ないよう直接訪問し、対面を実施。6名は住民の紹介による。
時間	一人当たり20分～40分
内容	事前に質問項目を設けず、八幡で聴こえる音について自由に回答してもらう。

表-2 2回目インタビューの概要

調査期間	2020年11月8日(日)～11月16日(月)
調査対象	初回インタビュー対象者のうち10名 対象者B、Dはそれぞれ対象者A、Cの配偶者で、インタビューに一部参加している。
方法	事前に連絡をした上、対面を実施。 対象者E、FおよびG、Hはそれぞれ2名同時にインタビューを実施した。
時間	一人当たり1～2時間
内容	初回のインタビュー以降新たに気づいた音についての質問と、初回インタビューで多く述べられた音に関する詳細の聞き込みを行った。また、地図を使用して郡上八幡の音について聞き込みした。併せて、郡上八幡の音にまつわるエピソードを適宜聞き込みした。

表-3 2回目インタビューの対象者

コード	年齢	居住年数	居住地
A	80歳	55年	北朝日町
B	—	—	北朝日町
C	65歳	50年	本町
D	—	—	本町
E	80歳	80年	肴町
F	72歳	50年	上樹形町
G	44歳	10年	山本町
H	45歳	2年	南朝日町
I	63歳	18年、6年	上日ノ出町
J	49歳	20年、6年	下愛宕町
K	72歳	18年、50年	大手町
L	56歳	26年	中坪

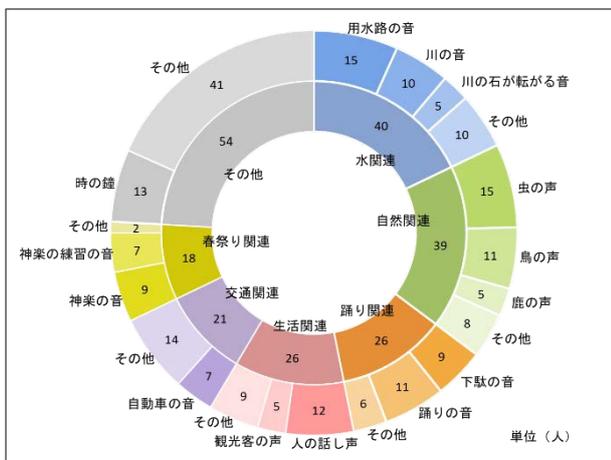


図-1 郡上八幡の音事象の種類

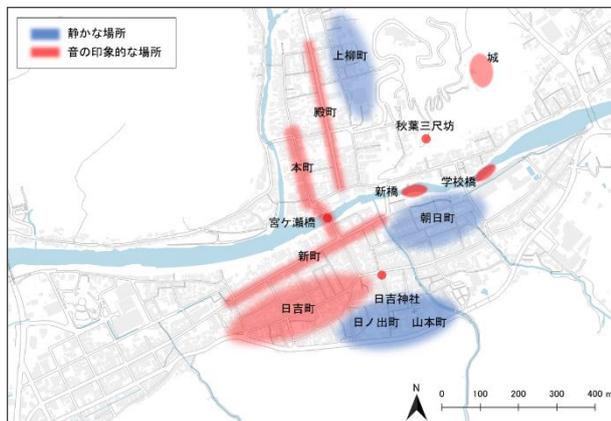


図-2 郡上八幡の音事象の空間的な構造

(3) 郡上八幡のサウンドスケープの季節的な構造

インタビューでは、これらの音事象と併せて季節的な要素が語られる様子が多く見られた。1回目及び2回目インタビューの結果から作成した郡上八幡の一年間の音を表-4に示す。

冬の音は極めて少なく、多くの音が春、夏、秋に集中している。また、一年を通して聴こえる観光客の声、自動車・バイクの音も、季節によって聴こえる頻度が違うことが言及された。鳥の声、虫の音といったカテゴリの中でも、特にウグイス、トビ、ヒグラシ、カジカガエルといった具体的な種に対しては、それらが鳴く時期、順番も住民の間ではおおむね共通して認識されている様子が見られた。

また、2020年の新型コロナウイルスの流行を受けて春祭り、郡上踊りが中止になったことに対して、これらの音が無いことにより季節感が薄くなったという指摘も多くなされた。住民には、自然の音とあわせて春祭り、郡上踊りも季節的な音だと認識されていると推測できる。

(4) 郡上八幡のサウンドスケープの空間的な構造

2回目インタビューにおいて地図を用いて音について聞き込みを行った際に得られたデータや、1回目インタビューで言及された音事象のうち具体的な場所が特定できるものを地図上に示した(図-2)。

新町、本町、殿町、郡上八幡城は、観光客の声が聴こえ昼間はにぎやかな地域として指摘された。一方日吉町周辺は飲み屋が多くあり、酔っ払いの音が聴こえるなど、観光地ではないが夜までにぎわいがみられる地域として認識されている。宮ヶ瀬橋と日吉神社の参道前の交差点は、春祭りの神楽が特別な曲と舞を披露する場所で印象的だと言及されている。また、川の音が特徴的な場所として、多くの住民が上流側に瀬がある新橋と学校橋を挙げている。特に、新橋上流部の瀬は大瀬(だいせい)という名称とともに言及されており、川の音が聴こえる代表的な場所として認識されていると考えられる。

3. 郡上八幡における地域認識としてのサウンドスケープの構造

対象者を絞って行った2回目インタビューでは、前章で示した音事象に関する情報のほかに、音にまつわるエピソードが収集された。本章では、地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにするために、インタビューの会話を録音し書き起こしたテキストデータに対して修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考にした分析を行った。

表-4 郡上八幡の音事象の季節的な構造

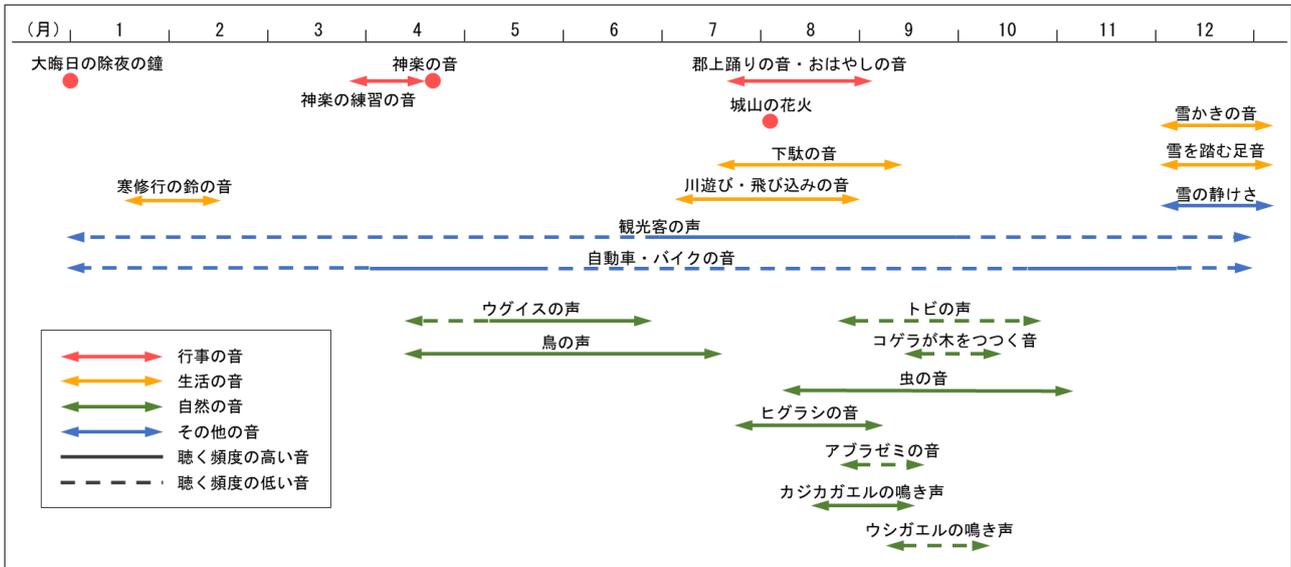


表-5 地域の音の認識として生成された概念とカテゴリー

カテゴリー名	概念名	定義
イメージとしての認識	季節性	音の聴取によって季節感が得られたり、補強されたりする印象があること
	地域のイメージ	ある地域・地区の音環境に対して抱いている総合的な印象
	空間的イメージ	地域に対するサイズ感や距離感などの空間的な印象と音の関係
	シンボリックな認識	行事や作品の中で音が引用されるなど、シンボルとして音が用いられること
媒体としての認識	状況の把握	音を手掛かりにして周囲の状況を把握すること
	近隣の生活音	近隣住民の生活の様子を伺い知れるような音が聞こえること
無意識	無意識	特別意識されることなく音が聞かれること
生活との密着	生活との密着	音が生活の中に入り込んでると認識されていること
音の受容	音の受容	種々の音が受容、許容されて認識されること
町の人の心持ち	コミュニケーションの音	挨拶などのコミュニケーションのための音があること
	大らかな気質	地域的な人々の気質として、大らかなものがあるということ
音の変化	音からの音への思い入れ	以前からの音に対して思い入れがあること
	音の変化	昔と比較した音の変化についての印象
構築環境の状態	町家の構造	町家の構造的特徴が、音そのものを成立させたり音の認識を容易にすること
	町の形態	郡上八幡の家並みや通りなどの町の形態が、音の聴取に影響を与えていること
	寺院の存在	寺院が町にあることが、町の中の音に対しての印象に影響を与えていること
社会的状況	少子化	少子化による町の音への影響が意識されている様子
	観光	観光と町の音との関係が意識されている様子
自然との関係	車社会	町や車と車社会との関係に対する考えや思いがあること
	自然への関心	動物や自然現象の音を聞き分けられたり、それらに対する知識の深さや興味があることがわかる様子
行事との関係	自然の変化	自然環境の変化を音を通して理解、察知していること
	川に対する関心	川に対して深い知識を持っていたり、興味があることがわかる様子
行事との関係	行事への思い入れ	地域行事への思い入れが行事の音に対する印象を強めること
	行事との隔たり	地域行事やその音に対して隔たりを感じていること

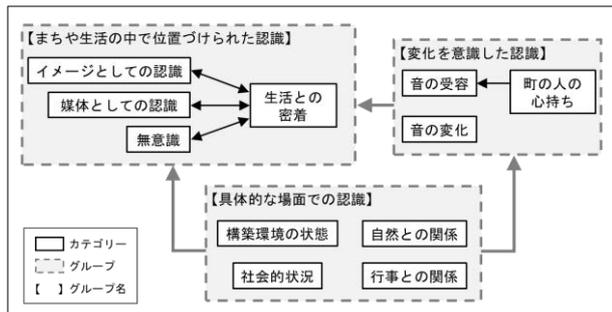


図-3 郡上八幡の地域認識としてのサウンドスケープの構造図

(1) 分析手法

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以後、M-GTAと表記) は、木下¹³⁾によって提示された質的分析手法である。具体的な手順としては、「分析テーマ」「分析焦点者」を設定し、その観点からデータの解釈を行い、テーマに関連する箇所を「具体例」として抜き出して「概念」を生成する。生成した概念にあてはまる他の具体例

を探しながらその概念の妥当性を検討しつつ、収集した具体例の他の解釈の仕方から他の概念を生成できるか検討を行うなど、概念同士の関係の比較検討を並行して行う。これを繰り返して、いくつかの概念のまとまりである「カテゴリー」を作り、それらを図化してプロセスや認識構造などを考察する。オリジナル版を含む他のGTAではデータを切片化した上で分析を行うが、本研究では前後の文脈から音との関連が考えられるエピソードなど、切片化された後ではテーマとの関係がわかりづらいものを含めて分析する必要がある。そのため、データの切片化を行わず直接解釈を行う本手法を参考に分析を行った。

(2) 認識の構造に関する考察

本研究では、分析テーマを「郡上八幡における、地域の音の認識の構造の研究」とし、分析焦点者を「郡上八幡の住民」と設定した上で(1)に示した分析手続きを行った。その結果として、25個の概念、11個のカテゴリーが生成された(表-5)。これらのカテゴリーの関係を図化したものが図-3である。なお、実際のカテゴリー間の関係は具体例に基づいて考察するため、1つの概念がカテゴリー全体や複数の概念と関係するものもあるなど、複雑な構造になっている。本研究では全体の構造を明確にするため、それぞれのカテゴリーを認識のメタレベルの違いに基づいて3つのグループに分け、その関係を図化して示した。以後、概念を◇、カテゴリーを□、グループ名を【】で表記する。また語りの引用の冒頭に表-3で示した発話者のコードを示す。

a) 【具体的な場面での認識】

環境や音源との関係が直接的に示されている4つのカテゴリーによって構成される。以下の[構築環境の状態]の中の〈町家の構造〉に含まれる語りでは、土間や坪庭があることによって聞こえる音が言及されている。

J: 何気なく下駄の音がコロコロンする。例えばそのおやじさんが風呂から上がって。…室内って言うかまあ、土間って言うか。

K: 春かな。やっぱ鳥の音、結構家へ来るでな。みんな結構あの、小さいながらも庭を持つとるんや。

以上の発話からは、それぞれ【まちや生活の中で位置づけられた認識】に含まれる、近隣の生活の気配を察知する[媒体としての認識]や、[季節性]といった音の捉え方との関係が考えられる。

b) 【変化を意識した認識】

音そのものや音に対する印象の変化が意識されたカテゴリーを含む。以下の[音の受容]に含まれる語りからは、【まちや生活の中で位置づけられた認識】の中の[季節性]との関係や、【具体的な場面での認識】に含まれる[行事との関係]との関連が考えられる。

F: それ(郡上踊りの音)はまあね、にぎわいとして、受け入れておられるもんね。無いと寂しいね。今年の寂しいことよ。

c) 【まちや生活の中で位置づけられた認識】

以上のグループでの認識を通じて、郡上八幡のまちとの関わりや生活といった中で地域アイデンティティとして音が理解された状態に【まちや生活の中で位置づけられた認識】があると考えられる。以下は[イメージとしての認識]の中の(地域的イメージ)に含まれる語り、水の音が郡上八幡を代表する音として捉えられている様子が見られる。

F: やっぱり水の音やね。どんな路地へ入っても水が流れているから。その、かすかな音が、一番気持ちがいい。

一方で[媒体としての認識]の中の(状況の把握)に含まれる以下の語りからは、特別象徴的でない音を手がかりとして生活習慣が身に着けられている様子がみられ、郡上八幡での生活の中で位置づけられた認識があることが考えられる。

G: 逆に雪かきの音で今日雪降ったんだって思う。6時とかに雪かき始めるわけよ。で、寝てるんでね、ガリ、ガリガリガリってなって始まって、っていう事は今日雪かあって。

d) 認識の構造の全体像

以上より、地域認識としてのサウンドスケープの構造として、メタレベルの低い【具体的な場面での認識】によって下支えされた【まちや生活の中で位置づけられた認識】と【変化を意識した認識】の、2つのメタレベルの高い認識があり、その中でも地域アイデンティティとして音を捉える【まちや生活の中で位置づけられた認識】では、特定の音との関係が明確な[イメージとしての認識]と、生活との結びつきが強い[媒体としての認識]があることが明らかになった。

4. 結論

本研究では、郡上八幡でのインタビュー調査をもとに、地域のサウンドスケープの実態としてその季節的構造、空間的構造を明らかにし、郡上八幡における地域認識としてのサウンドスケープの構造を明らかにした。

特に、地域認識としてのサウンドスケープの構造の分析からは、地域アイデンティティとしての音の認識の形として[イメージとしての認識]と[媒体としての認識]の2点があると明らかになった。[イメージとしての認識]は、象徴的な音事象やサウンドスケープの実態である季節的構造、空間的構造との関係が明確である一方で、[媒体としての認識]は、特定の音事象との結びつきがわかりづらいが、[構築環境の状態]などによって成立している音の認識であることが明らかになった。

以上よりサウンドスケープは、町家の構造など視覚的な側面から議論される対象の新たな特質を示すことができ、今後の景観まちづくりへの寄与が期待される。

参考文献

- 1) 柴田久, 齋藤勝弘, 池田隆太郎: 目的別系譜図にみる景観研究の動向 -08年から17年を対象として-, 景観・デザイン研究講演集, No. 14, pp. 91-102, 2018
- 2) 鳥越けい子: サウンドスケープ その思想と実践, pp. 50-60, 鹿島出版会, 1997
- 3) 荒井歩: 郡上八幡における水路網と伝統的音環境に関する研究, ランドスケープ研究, 65巻, 5号, pp. 711-716, 2001
- 4) 環境省 水・大気環境局: 残したい“日本の音風景100選”, 環境省, 2007
- 5) 古川日出雄, 佐々木葉: 生活景に着目したまちの音と住民の意識に関する調査研究, 景観・デザイン研究講演集, No. 6, pp. 141-147, 2010
- 6) 永幡幸司: 音環境の調査法 -ISO 12913シリーズに基づくサウンドスケープの調査法-, 日本音響学会誌, 75巻, 8号, pp. 473-480, 2019
- 7) 佐々木葉: 地域景観の議論のためのメモランダム, 景観・デザイン研究講演集, No. 7, pp. 160-165, 2011
- 8) 鳥越けい子: サウンドスケープ研究の課題と展望 神田地区におけるケーススタディーを通して, 騒音制御, 11巻, 3号, pp. 141-146, 1987
- 9) 平栗靖浩, 川井敬二, 辻原万規彦, 河上健也, 矢野隆: アーケード街路の音環境: 熊本市・長崎市中心市街地における実測調査, 日本建築学会環境系論文集, 71巻, 604号, pp. 1-7, 2006
- 10) 平尾和洋: 等音圧分布と周波数特性に基づく京都における音環境に関する一考察, 都市計画論文集, 36巻, pp. 835-840, 2001
- 11) 川井敬二, 小島隆矢, 平手小太郎, 安岡正人: 環境音の印象評価構造に関する研究 被験者自身の言葉に基づいた評価構造の抽出, 日本音響学会誌, 60巻, 5号, pp. 249-257, 2004
- 12) 文献2), pp. 110
- 13) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー論, 現代社会学ライブラリー 17, 弘文堂, 2014